体験型ワークショップ・特産品カフェ…

# 閉校校舎で地域盛り上げ

## 伊方 あす三崎高生らマルシェ

夏の一日、閉校した校舎がにぎやかに―。佐田岬半島の先端部にある三崎高校生が3日午前10時から、伊方町二名津の旧二名津中学校をまるごと使った「みさこうマルシェ」を開く。町外の高校や団体にも協力を呼び掛け、体験型ワークショップや特産かんきつを活用したカフェなど約20ブースを展開する。

インターネット電話「スカイプ」で小田高生とマルシェの打ち合わせを行う三崎高の生徒（右）

三崎高でまちおこしに取り組む「せんたん部」の2、3年生が中心となり初めて企画。2006年に閉校した同校を活用し地域を盛り上げる。

今回三崎高の呼び掛けに応じた川之石、小田の2校は、バルーンアートや小田深山の石を砕いて作る「石絵の具体験」などユニークな出し物を計画中。多肉植物の寄せ植えや砥部焼の絵付けなど多彩なワークショップも開かれる予定。

31日は、三崎高生と小田高生がインターネット電話「スカイプ」を使って当日の流れを打ち合わせ。教室のスペースやイベント内容などを確認していた。

小田高2年の清水雛乃さん(16)は「小田のことを知ってもらう機会になればうれしい」と語り、三崎高3年の竹内琉翔さん(18)は「子どもから大人まで楽しめる内容なので、家族で遊びに来てほしい」と呼び掛けた。

同日午後5時からは、住民らでつくる二名津まちづくり隊が近くの古民家などで音楽イベント「わが家ライブ」を開く。マルシェの問い合わせは三崎高＝電話0894(54)0550。

（伊藤愛）

2019年８月２日付　愛媛新聞

地域活性化に取り組む高校生が佐田岬の先端部に集まって意見交換する「せんたんミーティング」が28、29の両日、伊方町三崎の町三崎総合体育館で開かれた。県内外７校の40人余りが、それぞれの地域が抱える課題や解決に向けたアイデアを出し合った。

# 先端で考える 地域再興

## 伊方 県内外の高校生40人集結

地域活動をよりよくするための方法について活発に議論するせんたんミーティング参加者

## 分校化防ぐアイデアも議論

三崎高校が２０１７年度から毎年開催しており3回目。今回は「半島の先端で活動の最先端を語り合おう」と、地域活動を実践している学校に限定して呼び掛け、過去最多の参加者が集まった。

活動事例発表では、「地域を紹介するパンフレットを作製したら訪れる人が増えた」（今治北高大三島分校）「予土線の利用減少を食い止めるため、駅周辺のにぎわい創出に取り組んでいる」（北宇和高）など、地域の課題に根ざした取り組みを紹介した。

学校混成の班に分かれ、課題について議論。今年、文部科学省の新規事業指定校に選ばれ特例的に分校化が見送られた三崎高の班では「入学志願者を（県教育委員会の分校化基準の）41人以上集めるには」をテーマに話し合った。

他校の生徒からは「地元の中学生や保護者と接触するイベントが必要」「地域外の学生が入る寮の魅力をアップさせては」などの意見が次々。三崎高2年尾沢里咲さん(17)は「過疎化や少子化など似た課題を抱えた地域の高校生の意見だから参考になる。地域外から志願者を集めるために魅力をどう発信するか考えたい」と真剣に耳を傾けていた。

三崎地区の宝を探す散策もあり、参加者は江戸時代の棟札がある三崎八幡神社などを見学した。

出し合った意見は各校に持ち帰って実践に生かす。（今西晋）

三崎地区の歴史ある神社を散策するせんたんミーティング参加者

2019年10月1日付　愛媛新聞

ゴールの果汁で練り上げた求肥（ぎゅうひ）と、白あんで温州ミカンを包み、酸味と甘さのバランスがよい爽やかなスイーツに仕上げた。求肥には、煮こぼしで苦味を取ったデコポンの果皮で香り付けをしている。

表彰状を受け取った田村さんは「生徒らの取り組みが形となって現れたのはうれしい。地方で自営業者が減って活力がなくなっているが、佐田岬を起業家のメッカにしたい」と述べた。

三崎高校生徒会長の楠彩菜さん(17)は「先輩の作ったものを引き継ぎ、受賞できたのはうれしい。地域を盛り上げていきたい」と喜んだ。

商品を推薦した愛媛新聞社には「発掘賞」が贈られた。（武田亮）

令和元年１１月１８日(月)　愛媛新聞

伊方「みっちゃん大福」

## 名品大賞出品へ 三崎高生ら意欲

地方の隠れた名品を掘り起こす「こんなのあるんだ！大賞2019」の中国・四国ブロック予選で1位に選ばれた「みっちゃん大福」開発者の三崎高校生と和菓子店主が15日、地元の伊方町役場を訪問した。19日の全国大会に向け、高門清彦町長に「大賞を目指して頑張る」と意気込みを伝えた。

大福は2015年に当時の三崎高生が考案し、田村菓子舗の田村義孝さん(42)の協力を得て開発。地域の魅力を詰め込もうと、特産の温州ミカンを白あんで包み、生地にも地元産かんきつの果汁を練り込んでいる。

「こんなのあるんだ！大賞2019」の全国大会で「みっちゃん大福」の魅力をプレゼンする楠さん(左)と田村さん

三崎高2年の楠彩菜さん(17)は「みっちゃん大福を全国に広めることで、三崎高の良さも知ってもらいたい」と笑顔で宣言。高門町長は「伊方の魅力を全国に発信してもらいたい」とエールを送った。

大賞は、インターネット通販サイト「47CLUB」などでつくる実行委員会主催。19日は全国6ブロックの代表が最終プレゼンテーション行い、大賞商品が選ばれる。（伊藤愛）

2019 年 11 月 18 日付　愛媛新聞

WIDE EHIME

## 大久 丸ごと「劇場化」

### 伊方 三崎高生 伝統の踊り披露

上伊方町大久地区を舞台にした「せんたん劇場」で、しゃんしゃん踊りを披露する三崎高生ら 下「せんたん劇場」を楽しむ地元住民ら

佐田岬半島の伊方町大久地区を一つの劇場に見立て、三崎高校生と住民が交流を深めるイベント「せんたん劇場」が15日、同地区で始まった。生徒が住民らに教わった伝統行事「しゃんしゃん踊り」を披露し、大久の文化や魅力を確かめ合った。

総合学習の一環。地域ブランディングを手掛ける浜田企画事務所（京都市）の協力で、1、2年生50人が3カ月かけ企画した。初日は路地巡りツアーなどもあった。

集荷場では、地区で350年以上受け継がれる「しゃんしゃん踊り」を生徒が発表し、会場を埋めた住民ら200人から大きな拍手が送られた。

目の前に宇和海が広がる集落の特性を踏まえ、災害時の早めの避難を呼び掛ける紙芝居や防災かるたもあった。住民の協力で制作した移動式屋台では、半島に古くから伝わる「裂（さき）織り」のタグを付けた藍染めハンカチなどを販売した。

生徒としゃんしゃん踊りを踊った中里政明さん(67)は「文化を少しでも残したいという気持ちが伝わってくる」とほほ笑んだ。1年の竹本浩さん(16)は「自分のふるさとの大久にたくさんの人が来てくれてうれしい。魅力を一人でも多くの人に知ってもらいたい」と語った。

16日は集落内の絶景ポイントを巡る写真コンテストがある。（伊藤愛）

2020 年 2 月 16 日付　愛媛新聞

「こんなのあるんだ！大賞」受賞

# みっちゃん大福 知事絶賛

## 開発の三崎高生ら報告

「みっちゃん大福」の大賞受賞を中村時広知事(右)に報告した三崎高校の生徒と田村菓子舗の田村義孝社長＝18日午後、県庁

各地の優れた特産品を掘り起こす「こんなのあるんだ！大賞2019」で、商品部門の大賞に輝いた「みっちゃん大福」を開発した伊方町の三崎高校の生徒と田村菓子舗（同町二名津）の田村義孝社長(43)らが18日、県庁を訪れ、中村時広知事に報告した。

同大賞は、愛媛新聞社など全国の地方紙が運営する通販サイト「47CLUB」などでつくる実行委員会が主催。同サイトで扱う商品3万6千点が対象で、みっちゃん大福は県内から愛媛新聞社が推薦した。

18日は、田村社長が「4年前、生徒から地域を盛り上げるため、地域のかんきつを使ったスイーツをつくりたいとの話があった」と説明。温州ミカンを、清見タンゴールの果汁で練り上げた求肥（ぎゅうひ）と白あんで包み、酸味と甘さのバランスが良いという。

試食した中村知事は「文句のつけようがない。もちもち感が良い。（試作段階の時に）食べたことがあり、当時もおいしく商品化できると話していたが、ここまで成長しているとは」と太鼓判を押していた。

2年の尾沢里咲さん(17)は懇談後、「先週大阪で販売したとき、試食して笑顔で買ってくれる人が結構いた。後輩にも伝えていきたい」と話していた。

28日～3月8日に松山三越での物産展「ええね展」で販売する。（丸岡裕美）

2020年2月19日付　愛媛新聞

2020.2.20

## 地軸

佐田岬半島の真ん中辺り、海に面した小さな集落ににぎやかな声が響く。伊方町大久地区で先週末、三崎高校の1、2年生が中心となり、アートイベント「せんたん劇場」を開いた▲地区全体を舞台に見立て、住民らが身近な文化や魅力を再発見するのを促す試み。「来てもらう」ではなく、生徒たちが集落に「入り込む」姿勢が「みさこう」らしさにあふれ温かい▲全校80人ほどの三崎高では生徒の視点を生かした地域活性化活動が盛んだ。地元菓子店と開発した大福、住民の健康づくりのための体操、自主映画の製作…▲さまざまな挑戦が、達成感や自己肯定感につながっていることは、生徒たちの表情からうかがえる。2年の中元愛菜さんも「以前は人前に出るタイプではなかった」と言うが、今では担当するカフェ班のリーダーを務めるなど、成長を実感しているそうだ▲住民との協働で地域愛がはぐくまれ、南予に根ざし活躍する卒業生も増えたという。人口減少時代のヒントとなりうる好例だろう。「いつでも人がいて、楽しく温かな地域であってほしいと思います」。中元さんも地元で就職し、その一端を担うことを誓う▲半島には細かく裂いた古布と、麻や木綿などの糸を用いた「裂織り」という織物が伝わる。たとえるなら、横糸となる布が地域や住民、縦糸が生徒たちだろうか。それぞれがしっかりと組み合わさり、素朴ながら丈夫で、味わい深い故郷を紡ぐ。

2020年2月20日付　愛媛新聞

（第３種郵便物認可）

# 高校生まちづくり活動

文部科学省の「地域との協働による高校教育改革推進事業」の指定を受けている三崎高校（伊方町三崎）はこのほど、初年度の活動内容を発表する会を開いた。総合学習で取り組むまちづくり活動「三崎おこし」の成果を、生徒が実演を交えながらアピールした。

## 地域と協働 成果アピール

### 文科省指定 三崎高で発表会

事業は、体験と実践を伴った学びを実現するのが狙い。地域魅力化▽グローカル▽プロフェッショナル―の3類型のうち、三崎高は地域魅力化型の指定校になっており、2021年度までの3年間、地域課題解決に向け探求的な学びに重点を置く。

発表は20日にあり、商品開発やイベントなど7班が地域と連携した活動内容を報告した。商品開発班は伝統の織物「裂織り」を使ったシュシュやバッグを製作したとし「今後は地域産業の一つとして復活させていきたい」と強調した。

カフェ班は地元住民の協力を得て作った移動式屋台を会場に持ち込み、来場者を温かいコーヒーでもてなし。「屋台を使って多くの地域イベントに参加し、みさこうの魅力を伝えたい」と抱負を語った。

町見郷土館の高嶋賢二学芸員は各班の取り組みを評価し「佐田岬半島には魅力的な文化がたくさん残っている。もっともっと地域に入り込んで古い文化や歴史にも興味を持ってほしい」と講評した。

（伊藤愛）

まちづくり活動「三崎おこし」の取り組みを報告する三崎高生

2020年2月28日付　愛媛新聞